

やべ 矢部 はるな

学歴、職歴

平成14年3月 東邦大学 医学部 医学科 卒業  
平成14年4月 慶應義塾大学 耳鼻咽喉科学教室 入局  
平成15年7月 さいたま市立病院 耳鼻咽喉科 勤務  
平成18年1月 日野市立病院 耳鼻咽喉科 勤務  
平成20年7月 慶應義塾大学医学部 耳鼻咽喉科学教室 助教  
平成25年4月 川崎市立井田病院 耳鼻咽喉科 医長

所属学会

日本耳鼻咽喉科学会  
日本気管食道科学会  
日本喉頭科学会  
日本音声言語医学会

演題名

私にとっての男女共同参画とは ー若手女性医師の現状についてー

川崎市立井田病院 耳鼻咽喉科

矢部はる奈

## 1. 男女共同参画とは

近年しばしば男女共同参画という言葉を目にする。この男女が共同で参画した社会とは、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意志によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保されることで男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うよう形成された社会」と定義される。この基本理念に基づき、1999年に男女共同参画社会基本法が制定された。「参加」ではなく「参画」という言葉には、「仲間に加わる」だけでなく、物事の決定に至るまでの相談や議論の場に加わり、「女性も男性も主体的かつ平等に意思決定のできる社会を創る」という姿勢が打ち出されている。また、来るべき高齢化、少子化社会を支える担い手としても、女性の活用が必要とされている。

日本医師会は、厚生労働省の委託を受けて「女性医師支援センター」を設立、さらに2007年には「日本医師会女性医師バンク」を設立し、出産や育児で一旦離職した女性医師の職場復帰をサポートする場を設けている。しかしながら、女性医師バンクに参加しているのは一部の地域のみで、仕事の件数や内容も限られており、十分に機能しているとは言い難い現状がある。大学医学部や医学会における男女共同参画推進部門やキャリア支援部門の設置については、大学医学部は70.8%、医学会は45.6%と増加傾向であり<sup>1)</sup>、学会でこれらに関するセッションが行われることも多くなっていることから、関心の高さがうかがえる。2014年3月の日本循環器学会では「女性循環器医の勤務環境改善のための提言」が発表された。その一方、大学医学部や医学会では、意思決定の場への女性医師の参画は依然少なく、役員に女性医師が配属されていない医学会も存在するという事実がある。とはいえ、医学会でも男女共同参画部門のある学会は環境改善に努めており、2013年4月には日本内科学会理事会で女性評議員数を20名にすることが決議されている。このように女性医師がキャリアアップできる環境を整えることで意思決定の場への女性医師の参画推進を進めることが、男女共同参画推進にはまず重要と考える。

## 2. 女性医師の現状について

1980年には全医師に占める女性医師の割合は9.7%であったが、2012年には19.7%を占めており、約30年間で10%増加している。また、医療施設に従事する医師については、年齢が低くなるほど女性の割合が高く、29歳以下では35.3%となっている<sup>2)</sup>。今後も女性医師の割合は増加すると考えられ、医療現場における女性医師の労働力は不可欠となっている。

しかしながら、女性医師の約2割が結婚や出産を機に、あるいは育児や介護との両立の困難さから

医師の仕事を辞めたり、第一線を退くと言われている。守屋らは、女性医師の離職理由としては「出産・育児」が80%と圧倒的に多く、他に「不妊治療」、「妊娠」、「介護」が挙げられると報告されており3)、子育て中の女性医師への適切な支援を充実させることが、女性医師の離職を防ぐことに繋がると考えられる。

以前より日本の医師は長時間労働や連続勤務、オンコールなどの厳しい勤務環境におかれているとされ、労働基準法では、労働者の1週間の労働時間は週40時間と定められているが、勤務医では週60時間以上働いている人が全体の4割を占める。また、宿直翌日も通常通り勤務する人は86%にも及ぶと報告されており4)、ワークライフバランスの取れた職場環境とは言い難い現状がある。このような労働環境では、当然子育て中の女性医師が常勤医と同等の労働を続けることは難しくなるため、まずは医師全体の労働環境の改善が望まれる。そして、さらに女性医師に対する支援環境を整える必要がある。

今回、我々は慶應義塾大学耳鼻咽喉科入局後15年目までの女性医師30名に出産・育児に関するアンケート調査を行い、若手女性耳鼻咽喉科医師の現状把握と問題点の検討を試みた。アンケートの結果、48%が出産を経験していたが、96%の女性医師が何らかの形で働き続けることができおり、78%が病院で常勤医師として勤務していた。出産育児を経験している女性医師からは、育児と仕事の両立を困難にしている理由として「職場と家庭の支援不足」が多く挙げられ、キャリアを継続させるためには保育環境の整備と勤務・診療体制の整備が必要、という共通認識が認められた。一方、耳鼻咽喉科の仕事については、他の科に比べて外来の需要が多く何らかの形で診療に関わりやすいことから、育児と両立しやすいという声が多かった。

### 3. 将来展望

気管食道領域において、女性医師が専門性を活かしてキャリアを積むことは十分可能と考えるが、気管食道科学会の女性会員の割合は10%程度と少ない。2014年11月に本学会においても男女共同参画委員会が設置されており、今後の女性医師への支援が期待される。

- 1) 高橋克子：大学医学部，日本医学会分科会，医学会の男女共同参画は進んでいるか.日医雑誌 143：1232-1235，2014
- 2) 厚生労働省：医師・歯科医師・薬剤師調査 4-5，2012
- 3) 守屋普久子：久留米医雑誌 78：86-91，2015
- 4) 独立行政法人労働政策研究・研修機構：勤務医の就労実態と意識に関する調査 4-9，2012